

61 孤立性肺結節影のCT鑑別診断と臨床的意義

群馬大学中央放射線部,¹⁾群馬がんセンター外科,²⁾
群馬がんセンター放射線部³⁾

○松本満臣,¹⁾清水幸夫,²⁾前原康延³⁾

目的：CTによる形態分析と既存構造との関連を悪性・良性パターンに分けて系統的に診断する方法は80数%の確率で良性・悪性の鑑別が可能であることを第28回本学会総会(1987)で報告した。本読影法の信頼度を評価する目的で、手術症例の術前病理診断の有無と予後の連について検討し画像診断の意義について考察した。

方法・結果：群馬がんセンターにおいて切除された肺癌例を対象に、術前診断の有無による生存率を検討した。同一病理病期における術前診断の有無による生存率はI期では確診(-)24例の5年生存率93.1%で、確診(+)¹⁾18例のそれは61.1%であった。III A期では確診(-)10例の5年生存率は20.0%で、確診(+)²⁾20例のそれは4.5%であった。扁平上皮癌83例では、確診(-)の9例の5年生存率は58.4%、確診(+)³⁾の74例では43.4%であったが、腺癌93例では確診(-)43例の5年生存率は57.8%であったのに対し、確診(+)⁴⁾50例のそれは13.4%であった。

考察：以上のごとく術前診断の得られない群の方が生存率が高いことから、CTによりわれわれの分類で悪性の確率が高いもの、すなわち不整形腫瘤影、辺縁が平滑であるが悪性パターンを示すものはいたずらに経過観察することなく手術されるべきと考える。

63 食道超音波内視鏡による心脈管浸潤の検出能

順天堂大学呼吸器内科

○檀原 高, 植木 純, 饗庭三代治, 玉城 繁,
吉良枝郎

目的：肺癌・縦隔腫瘍などの胸郭内腫瘍疾患の治療では、外科療法が治療の基本となることが多く、術前に脈管浸潤の評価を適切に行うことは、手術の可否・術式を決定する際には重要となる。今回、肺癌・縦隔腫瘍を対象に、食道超音波内視鏡(以下本法)による心脈管浸潤の検出能について検討を行った。

対象・方法：対象は肺癌13例、縦隔腫瘍15例の計28例である。対象症例では、本法で腫瘍と心血管系が少なくとも接しており、手術・剖検で腫瘍の心脈管浸潤の有無が評価しえた。検討部位は、肺動脈・肺静脈・左房・上下大静脈などの81部位である。使用機種は、先端部に7.5MHzのリニア電子走査型探触子を内蔵した消化管内視鏡(EPE-703F, 東芝・町田社製)である。

結果・考察：心血管系への腫瘍浸潤を認めた27部位で注目された超音波像の所見は、①腫瘍に接した脈管の変形・内腔に突出する進展、②腫瘍と脈管壁との呼吸・拍動時の滑走の消失、③腫瘍と接する脈管壁の層構造の消失・変化、④腫瘍と脈管壁との広範囲の接触の各所見である。各所見での腫瘍浸潤の検出率をaccuracyで見ると①79%、②89%、③95%、④65%であった。腫瘍の脈管浸潤の評価で、前述の超音波所見②③が重要な所見と考えられる。

62 EUSを用いた肺癌縦隔リンパ節転移の術前評価

長崎大学第一外科

○遠近裕宣、綾部公認、川原克信、田川 泰、
謝 家明、原 信介、岡 忠之、辻 博治、
仲宗根朝紀、谷口英樹、久野 博、山口広之、
碓 秀樹、富田正雄

昭和63年12月から平成元年4月迄の5ヶ月間にEUSを施行した原発性肺癌20例(右側:11例、左側:9例)について縦隔リンパ節転移の術前評価をCTと比較検討した。食道と気管の位置関係から、主として#7とAP-Window部のリンパ節(左側#4+#5)について検討した。

リンパ節の存在診断については、#7ではSensitivityがEUS89.5%:CT52.6%、Accuracyが85.0%:50.0%であり、左側#4+#5ではSensitivityが100%:75%、Accuracyが100%:77.8%と、Sensitivity、Accuracyで明らかにEUSがすぐれていた。

観察されたリンパ節数の平均値は、#7でEUS2.3個:CT1.2個:摘出標本5.3個、左側#4+#5で各々3.1個:1.8個:5.3個と、EUS、CTの所見と実際に郭清したリンパ節とは必ずしも一致をみなかったが、EUSのほうがCTよりも小さなリンパ節まで描出可能であった。

組織学的に転移陽性であった3例3部位(#7が1例、左側#4+#5が2例)で、EUS所見をretrogradeに検討すると、リンパ節の最大径は各々18mm、13mm、5mmであり、境界コントラストは転移陰性例に比して比較的明瞭であった。

64 シネMRIによる肺癌の心大血管浸潤の検討

聖マリアンナ医科大学放射線科,¹⁾第3外科²⁾

○中島康雄,¹⁾栗原泰之,¹⁾山口敏雄,¹⁾宮川国久,¹⁾
黒木一典,¹⁾新美 浩,¹⁾石川 徹,¹⁾平 泰彦,²⁾
長田博昭²⁾

目的：肺癌の心大血管浸潤の診断に対しMRIの有用性は確立されてきた。一方 low flip angle による短時間撮像法の進歩によりシネモードによる撮像も可能になり、既に心・大動脈疾患に応用されている。今回われわれはシネMRIによる肺癌の心大血管浸潤について検討したので報告する。

対象：CT, MRIで腫瘍が心大血管に接し、直接浸潤が疑われた15症例。

方法：MR装置はフィリップス社製、1.5 Tスラ超電導装置で、心電図同期による通常のSE法による静止画像とともに、腫瘍と浸潤の疑われた臓器の接触面に直交する断面面を選択し、動画像を作製した。シネMRIによる診断と手術所見、通常のMRI, Dynamic CT, 超音波検査(経食道超音波検査を含む)所見と比較した。

結果及び考察：主幹部の肺動静脈および右房、左房浸潤に対しては浸潤の程度をも評価可能であったが、大動脈への浸潤の深さの診断に対しては分解能の劣化のためCT, 通常のMRI、以上の情報は得られなかった。本法は腫瘍と心大血管を同時に動的に観察できるため、特に術前検査として有用であると思われる。